

明治時代における「食人」言説と魯迅の「狂人日記」

李 冬 木

〔抄 録〕

本論は魯迅「狂人日記」の「食人」というイメージの創出について研究するもので、明治時代における「食人」言説が「狂人日記」のモチーフにある種の「母題」というべきものを提供したのではないかと考える。この観点を確証するために、主に二つの仕事に取りかかった。一つは明治以来の「食人」言説について全面的に調査・整理し、モースから神田孝平への流れを浮き彫りすること、即ち本論文の「Ⅱ」～「Ⅴ」であり、もう一つは、明治以来の「食人」言説全体と魯迅との「接点」を探し出すこと、即ち「Ⅵ」～「Ⅷ」である。具体的にいえば、芳賀矢一『国民性十論』と「狂人日記」の「食人」イメージとの決定的な関連を論証したのである。最後に、「狂人日記」は主題から形式まですべてが参考と模倣によって誕生したことである——ひょっとして、これは今日まで依然として中国文学の避けて通れない道ではないか、という結論を出した。

キーワード 魯迅、「狂人日記」、「明治時代」、「食人」言説、『国民性十論』

1. はじめに

小説「狂人日記」は中国近代文学の第一作であり、作者が魯迅というペンネームで発表したものの第一作でもある。1981年4月に書かれ、同5月の雑誌『新青年』四巻五号に掲載された。中国近代文学および作家「魯迅」の誕生そのものにかかわるだけに、90数年来、「狂人日記」に関する研究が中国近代文学研究史および魯迅研究史の中で重要な一ページを占めてきた。『中国知網』のデータベースを検索しただけでも関係論文の収録数は1400篇を超え、「狂人学史」¹という言い方も生まれたほどであった。

そのなかにおいて、「狂人日記」はどのようにして書かれていたか、その創作の過程はどのようなであったが重要な課題として多数の研究論文が書かれてきたが、基本的に作者魯迅自身の「説明」の方向に沿って論述を展開するものがほとんどであった。つまり、魯迅の言ったところの、作品の「形式」をゴッリの同名小説から、「礼教」(封建道徳)が「人を食う」という

封建道徳の非人間性を暴露するモチーフを『資治通鑑』から、それぞれの創作ヒントを得たというのが一般的常識として定着させられてきた。とりわけ実証的研究によって、「狂人日記」という作品名および「日記」というカタチを、直接的に明治四十年雑誌『趣味』第二卷第三、四、五号に連載された長谷川二葉亭主人（二葉亭四迷）による日本語訳のゴゴリの「狂人日記」から「借鑑」したもの、という事実が明らかにされた。²しかし、作品のモチーフにかかわるところでは、いくつかの疑問点が残されている。たとえば、「たまたま『通鑑』を読んでいて、中国人はやっぱり人食い民族であったと悟り、これでこの作品を書いたわけです」³という以上、魯迅の読んでいたのは『資治通鑑』のどのような記述なのか、しかもそもそも『資治通鑑』を読むきっかけは何か、といったような問題点が作品の「食人」というイメージの創出に密接な関係があるにもかかわらず、それはいまなお未解決のままである。

「狂人日記」が読者に衝撃をもたらしたのは、なによりその「食人」（中国語原語は「吃人」）イメージの創出である。「食人」は主人公の「狂人」を恐怖の妄想に陥れ、読者をも強烈に揺り動かす。

「狂人日記」は中国語原語4870字の作品であるが、「食人」という語は28回現れ、平均的に170字に一回使用されており、作品全体を支えるキーワードそのものである。それにとどまらず、「熱風」（四十二、五十四、1919）、「灯下漫筆」（1925）などに見えるように、「食人」というイメージはやがて中国文明史批判までに広がり、「魯迅」全体を貫くキーワードの一つとなっていると思われる。ならば、「食人」というイメージは魯迅においていかにして創出されたのであろうか？本論文は、明治時代における日本の「食人」言説を考察し、その手がかりを探ろうとするものである。

結論を先にいうならば、「狂人日記」の「食人」というイメージの創出は、明治時代において日本で展開された議論にある種の「知的」背景を有すると筆者は考えるものである。言い方を変えれば、明治時代における「食人」言説が「狂人日記」のモチーフにある種の「母題」というべきものを提供したのではないか。

もちろん、これはまだ単なる一つの仮説に過ぎない。この仮説を確かめるため、しばらく「狂人日記」を離れ、まず明治時代における「食人」言説はどのようなものであったか、なぜこのような話題があったのか、またこれについてどのように議論されたのかを見る必要がある。なお、本論文では、漢数字を以て日本年号を表す。

Ⅱ. 明治時代における「食人」または「人肉」の言説に関する基本的文献

筆者は「食人」または「人肉」を手がかりにして、関連文献を調査し、日本近代以来の「食人」または「人肉」に関する言説については、一応それが明治期に発生・成型し、大正期に定着し、昭和から今日まで引き続いているという認識を得た。

「狂人日記」との関連性から見れば、文献調査の重点はもちろん明治期に置くが、一種の「言説」としての持続性、および魯迅のこの作品の創作、発表時期が時間的に大正期とかなり重なり合うことを考慮し、調査範囲を大正末までに拡大することにした。そこで、明治・大正期における「食人」または「人肉」に関する言説の文献的「総量のアウトライン」を入手したわけである。ここでいう「総量」とは、言うまでもなく筆者の調査範囲に限られ、単なる「アウトライン」にすぎない。しかし、たとえ「アウトライン」であるとしても、その中に主要かつ基本的な文献が含まれていると信じる。図表1をご参照請う。

4

出版物種類 時期 年代	書籍：	雑誌：	読売新聞：	朝日新聞：	総数
	1882-1912; 1912-1926	1882-1912; 1912-1926	1875. 6. 15-1912. 4. 9 1913. 9. 4-1926. 5. 31	1881. 3. 26-1911. 3. 24 1913. 10. 20-1926. 10. 29	
明治期	34	20	22	49	125
大正期	28	15	29	64	136
合計	62	35	51	113	261

表の通り、調査対象にあたる明治・大正の基本的な出版物は、具体的に書籍、雑誌、新聞に分けてみた。新聞は便宜上『読売新聞』と『朝日新聞』のみを取り上げ、ほかのものは統計に組み入れていない。限られたこの調査結果によって、1875年から1926年までの半世紀において関連文献が261点もあったことがわかった。これらの文献は本論のいう「言説」の基本的な内容とその過程を構成しているが、ここでいくつかの説明を付け加えたい。

一、数でいうならば、二大新聞の文献点数ははるかに書籍と雑誌の文献点数を超え、164対97の割合を呈するが、「言説」としての影響、内容の系統性や深さにおいて後者と比べ物にはならないので、本論は、新聞を参考文献として扱う。

二、文献の主体として取り扱う書籍および雑誌は、時間的には47年間（1879—1926）、その数量は97点、毎年平均およそ2点という具合である。この点からみて、「食人」または「人肉」をめぐる「言説」が熱くなるほどのブームではないものの、完全にマイナーな分野でもなく、持続的探求がずっと存在し、その流れがいつまでも絶えないといった観を呈する。

三、書籍と雑誌との関連性が認められる。書籍のいくつかは雑誌に掲載された文章に由来している。なお、同一の書籍の再版の場合もある。

Ⅲ. 「食人」または「人肉」に関する言説の時代的背景とその成因

そもそも、明治時代においてどうして「食人」または「人肉」、つまりCannibalismに関する言説が現れるのであろうか。或いはどうして「食人」または「人肉」を問題として取り上げ、それを考察し、議論するようになったのであろうか。その時代的背景はどのようなものか。その源を溯って細かく追究するならば、必ずその「前史」に触れなければならないわけだが、ここでは一応「四捨五入」の方法をとって、話題を明治時代に限ることにする。そういった意味では、「文明開化」そのものが明らかに「食人」言説の大きい時代的背景であるに違いないが、視点を絞れば、少なくとも3つの具体的な要素が考慮に値すると思える。

その一は、「食用牛肉の始」である。

その二は、知識の開放・拡充および「時代的興味」である。

その三は、大森貝塚によるモースの発見およびその関連報告である。

その一は、「食用牛肉の始」である。肉さえ食べたことがない人に「肉」について議論させるのは非現実的であり、まして「人肉」に関わる話である。こういう意味で、明治時代のいわゆる「食用牛肉の始」及びそれに関連する言論は、のちの「食人」または「人肉」に関する言説の物質的な前提及び潜在的な言語前提の一つとなっていると言えるであろう。

それは今日のわれわれの想像をはるかに超えた「肉」に対する敏感な時代であった。「文明開化」に伴って、肉が来た、牛肉が来た。それは嗅覚上及び味覚上の衝撃にとどまらず、根本から精神意識を揺り動かす出来事であった。受け入れるかそれとも否か、食べるかそれとも否か。これまで肉を食べずなおかつ肉を「不潔のもの」と見なす圧倒の多数の日本人にとって、それは一つの大きな苦悩、一つの大きな決断であったにちがいない。最終的には国を挙げて「食う」ことにしたが、その思想上の波紋が鮮明に歴史に刻まれている。明治五（1872）年正月二十四日に天皇の「勅進肉饌」についての記述に曰く、「時に帝中葉以降肉食ヲ嫌忌スルノ陋俗ヲ除革セント膳宰に勅し始メテ肉饌進メシム聞ク者嘖々叡慮ノ果決ナル率先シテ衆庶ノ迷夢ヲ喚醒スルヲ称ス」⁵と。「肉を食べる」ことはイコール「文明開化」であった。肉を拒否し、「肉食を嫌忌する」ことは野蛮な風俗（陋俗）であり、「除革」しなければならないものであった。天皇自ら率先して「勅進肉饌」という行為自体が、一種の「明治啓蒙」となる。このあたりの詳しい事情は石井研堂の『明治物事起原』⁶に譲るが、ともかく、こういったように、上から下へ、国を挙げて風俗を改めて、いわば肉を食べる「文明時代」を切り開いた。

明治時代の「文明開化」は、日本国民を肉を食べる行為に導いたのみならず、客観的には「肉」に対する敏感さとある種の関心を喚起した。したがって、「人肉」や「食人」なども潜在的な関心の対象となりうる。例えば、「肉を食う」ことが「開化」であり、「文明的」である以上、そこからすぐに出てくる問題は、世界になお「食人種」が存在することを知って、彼らの「肉を食う」行為をいかに評価すべきか、ということであった。当時の「文明論」あるいは「進

化論」の常識から、これらの人種を「野蛮人」と規定するならば、「肉を食うわれわれ」と「肉を食う彼ら」との本質的違いはどこにあるのか。さらに、自分を含めた世界の「文明人種」も恐らく人を食う可能性があるという事実を知った時、どのような混乱が発生するのであろうか。筆者は、これらがすべて「牛肉食用の始」を実践したとき、デフォルトされた「食人」または「人肉」の言説に関する潜在的な問題であり、後者へ発展する大きい暗示性をもつと思う。

その二は、知識の開放、拡充および「時代的興味」である。勿論、明治時代にあつて、「文明開化」は決して単なる肉を食べることにとどまらず、より重要なのは知的啓蒙であつた。明治元(1868)年4月6日に「五箇条の御誓文」を公布し、その第5条に書かれた「智識ヲ世界ニ求メ」⁷はその時代の一大特徴である。西周(1829-1897)の「文眼」を借りていえば、それはまさに「百学連環」なおかつphilosophyから「哲学」という語を創出した時代であつた。⁸『明六雑誌』と『東京学士会院雑誌』に示されたように、知識官僚たちは「文明」に対して幅広い関心を持ったが、そのなかには「食人肉」に関する話題もあつた(後述)。民間社会も国内外から伝わってきたこの類の「珍事」に強い好奇心と情熱を寄せている。いわゆる「食人」または「人肉」の言説はこうした大きな知的背景下で展開されたのである。一般庶民にとって、この類の「天下奇聞」に接する手段は主に新聞や文学作品であつた。例えば明治八(1875)年6月15日日付の『読売新聞』と『朝日新聞』にはほぼ同じ記事が掲載されている。播州の一官僚が下女と密通したのをその「細君」に知られ、夫の出張留守中、「細君」は下女を殺し、その肉の「刺身」を帰ってきた官僚に出したという。また翌年10月19日の『読売新聞』には、フィジー島食人族の記事もある。明治十五年(1882)年に出版された清水市次郎『絵本忠義水滸伝』第五冊卷之十四には「母夜叉孟州道にて人肉を賣る」というタイトルのもあるが、おそらくこれらのおとくに聞き慣れていた東洋の物語よりも、やはり西洋からの「人肉」ストーリーのほうがより人々の好奇心を喚起したようである。シェークスピア(Shakespeare William, 1564-1616)の『ヴェニスの商人』は井上勤(1850-1928)の手で日本語に訳され、明治十六(1883)年10月に東京今古堂から出版されてから3年のうちに、少なくとも6種類のバージョンが出回っている。⁹これには雑誌に掲載したものは入っていない。なぜこれほど熱く読まれたのであろうか。神代種亮(1883-1935)の見解を借りて言えば、この本の「ハイライト」というべきものは2点あつて、「一つにはその題名の奇なること、二つには裁判を題材としている点」であり、この2点とも「時尚に投じたる」とある。¹⁰いわゆる「題名」は現代の通称『ヴェニスの商人』ではなく、『西洋珍説人肉質入裁判』である。「人肉」は明らかにこのストーリーの「ハイライト」となっている。ヴェニスの豪商であるアントーニオが親友のバサーニオの婚姻を助けるため、わが体の1ポンドの肉を抵当に、ユダヤ人高利貸シャーロックに借金し、そこから人々をどきどきさせる訴訟が起こつた。当時の読者にしてみれば、これはまさに感嘆すべき「西洋珍説」であり、「所謂文明開化期の日本人」の「一種の興趣」¹¹となつたのである。

事実上、文学作品はずっとこのような時代「興趣」と「食人」言説の重要な媒体として「活躍」してきた。『人肉質入裁判』のほか、同じ時期に翻訳された『寿其徳奇談』¹²、羽化仙史『食人国探険』¹³、洪江不鳴『裸体遊行』¹⁴などがこの方面の代表的なものである。

しかし、「人肉のストーリー」は単なる珍奇なものへの興味の範囲にとどまらず、やがて新興科学分野におよぶ言説となった。とりわけ米国の動物学者モース（Edward Sylvester Morse, 1838-1925）の到来は、日本に最新理論としての進化論をもたらしたにとどまらず、「食人」という言説を一気に進化論、人類学、法律学、経済学及び文明論までに拡大させた。それは大森貝塚の発見とその関連報告であった。

モースは米国メイン州ポートランド市に生まれ、1859年から約2年間、ハーバード大学で助手を勤めながら聴講した。ダーウィン（Charles Robert Darwin, 1809-1882）『種の起原』（1859）の出版と同時期で、モースはその時点から次第に進化論に傾く。明治十（1877）年6月、腕足類動物を調査するために自費で日本を訪れ、間もなく日本文部省に東京大学の動物学および生理学教授として招聘された。モースの東大での講義は、その聴講生である石川千代松（1860-1935）によって整理され、出版された。『動物進化論』（万卷書房、1883）と『進化新論』（東京敬業社、1891）である。いずれも公認の日本における進化論の初期段階の重要文献であり、¹⁵魯迅が日本留学に来てからの進化論学習の教科書でもある。¹⁶モースの最大の貢献はなんと言っても大森貝塚の発見であった。1877年6月19日に列車で横浜から新橋へ向かう途中で偶然に発見、同年9月16日に東大生らを連れて発掘を始めた。その調査・発掘報告は1879年7月に東京大学より出版された“Shell Mounds of Omori”である。¹⁷大森貝塚の発見およびモースの研究報告は、当時、センセーションを引き起こしたが、なかでも、衝撃的だったのは恐らく彼が発掘した人骨に基いた1つの推論で、かつての日本には「食人種」が存在したかもしれないということであった。容易に想像できるが、1878年6月のある日、彼が東京浅草須賀町井深村楼で500名余の聴衆に向かって初めてこうした推論を公表した時、¹⁸「文明開化」の道を慌ただしく急いでいた「明治日本」にとってどれだけの震撼を与えたことであろう。

これがその後の「食人」または「人肉」に関する言説の「科学的」展開のきっかけとなった。

IV. モース以後の「食人」に関する言説の展開

最初にモースの上述の見解を日本語テキストの形態で公表したのは、明治十二（1879）年、東京大学出版会から出版された『理科会粹』第一帙上冊に掲載された「大森介墟古物編」であった。そのなかの「食人種の証」というサブタイトルの下で、明確に次のようにモースの推定を記述している。

猪鹿骨支離散乱せる中に往々人骨あるを認め……その一も倫序を成せるものなく恰も世界各所の介墟における食人の跡と正に一轍なるを知れり、則ち其骨片は往々他の鹿猪の骨と共

に其当時骨髓を収め或は鍋に投ぜんが為に摧折せられたるの痕を留めて人為の跡斑々掩ふ可らず、殊に此等の骨は筋の剥脱し難き処に於いて、削痕を留むる最も深く且つ摧残の甚しきを見る。¹⁹

これはモースが日本の縄文時代に食人風習があったことを推定する要というべき1段落である。管見では、この思想史における意味は、恐らく考古学上の一推論よりも、より重要であろう。なぜなら、モースによって、いわゆる「食人」は自分以外の「他者」の「野蛮風俗」とは限らず、日本史と日本精神史までかかわる「自分自身」の問題であることを指摘されたからである。言い換えれば、これによって「他者」は「自分」に転化されたのである。日本の過去にも食人種が存在していたのであろうか、食人風習もあったのであろうか。これらの疑問の背後には、ひょっとしたら自分も食人者の後裔であるかもしれないという困惑があったにちがいない。事実上、それ以後、代表的な論文または書籍の多くは、モースのこの論断をめぐって展開した。「モース」が後続の「食人」言説のいわゆる「問題意識」のベースとなっているといえる。

モースに対する「反応」として、最も注目すべきなのは、「人類学会」の創立とその会誌に関連する文章である。「人類学会」はのち「東京人類学会」を改名したが、正式に創立したのは明治十九(1886)年2月であり、その会誌の名称は学会名の変更に伴って『人類学会報告』から、『東京人類学会報告』を経て『東京人類学会雑誌』へと変わるのである。当初の関心対象は「動物学上及び古生物学上人類ノ研究、内外諸国人ノ風俗習慣、口碑方言、歴史前或ハ歴史上詳ナラザル古物遺跡等ノ事」²⁰であり、その目的は「人類ノ解剖、生理、發育、遺伝、変遷、開化等ヲ研究シテ人類ニ関スル自然ノ理ヲ明ニスルニ在リ」²¹とある。在学生を中心メンバーとする今風にいえば大学「学習サークル」のような学生同人団体であるが、発起者の一人である坪井正五郎(1863-1913)によると、彼らに生物学や考古発掘への興味を持たせたのは、やはり「大学教授イ、エス、モールス君ガ明治十年ニ大森ニテ貝塚ヲ発見サレ」²²たことをきっかけとしたとのことである。そこで彼らも日本の古人類に関する発掘・調査を開始すると同時に、議論を行った。月一回の例会は、学会を正式に設立するまでに14回開かれ、第15回例会の報告は『人類学会報告』の「第壺号」の内容にあたる。メンバーも当初の4人の「同好者」から28人までに増え、その後参加者がだんだん多くなり、遂に日本近代における正規の人類学学術研究機構になったという。

むろん、「食人」、「食人種」、「食人風習」なども「人類学」の興味と課題の対象の一つであった。会報に見える関連文献には主に次のようなものがある。

- (1) 入澤達吉「人肉を食ふ説」, 第二卷十一号, 明治二十(1887)年一月
- (2) 寺石正路「食人風習に就いて述ぶ」, 第四卷第三十四号, 明治二十一(1888)年十二月
- (3) 寺石正路「食人風習論補遺」, 第八卷第八十二号, 明治二十六(1893)年一月
- (4) 鳥居龍蔵「生蕃の首狩」, 第十三卷第一百四十七号, 明治三十一(1898)年六月

(5) 記事：「食人風習考」（著者不詳，寺石正路の著書の紹介），同上。

(6) 伊能嘉矩「台湾における食人の風俗（台湾通信ノ第二十四回）」，第十三卷第一百四十八号，明治三十一（1898）年七月。

(7) 今井聰三抄訳「食人風俗」，第十九卷第二百二十号，明治三十七（1904）年七月。

そのうち、(1)と(7)は西洋学者の「食人」に関する調査と研究を紹介するもので、(2)(3)(5)はどちらも寺石正路（1868—1949）に関連するものの、事実上、明治の「食人研究」において最も形が整っていて、理論化されたものがこの寺石正路の論文である。豊富な「食人」に関する事実を提供しているにとどまらず、進化論を用いて解釈しようとする試みが見える。上述のモースの推断について、反対か賛成かということになると、その判断にはかなりの「迷い」が見られるが、ほかの学者と違うところは、日本の古文献の中からだれよりもより多くの「食人」の例証を探し当てていることである。明治三十（1898）年、彼は自分の研究を一冊の専門書にまとめ、東京堂「土陽叢書第八編」として出版した。書名は『食人風俗考』である。そのうち(4)と(6)は台湾「生蕃」の「食人」に関する現地報告であるが、日清戦争後の日本の台湾進出に直接にかかわると思われる。

上記『東京人類学会雑誌』に掲載されたもののほかに、注意に値するものとして2点挙げられる。イギリス人宣教師ジェー・バチエラ（John Batchelor, 1854—1944）の著書『アイヌ人及其説話』（明治三十三、三十四[1900—01]年）と河上肇（1879—1946）の論文「雑録：食人論—食料トシテノ人肉ヲ論ス」（明治四十一年（1908）年）である。前者はジェー・バチエラが明治十六（1883）年から北海道で布教し始めるとともに、アイヌ人に対する観察・研究も行い、英文で書かれた論文をまとめたという形で、改めて日本語で出し直したアイヌ人に関する専門書であり、アイヌ人の研究に大きな影響を与えた。その第二章「アイヌ人の本居」に「アイヌは始め日本全国に居住す。富士山はアイヌの称呼なり。アイヌ蝦夷に駆逐せらる。アイヌは人肉食人種なり」²³という記述があるので、ここからアイヌは「食人肉」というレッテルが貼られたのかもしれない。後者の作者である河上肇はマルクス経済学を東アジアに導入した重要な経済学者として、中国においても影響力を持っている。たとえば、郭沫若は1924年に彼の「社会組織と社会革命」を中国語に翻訳したのをきっかけに『資本論』の翻訳に取り組んだ。1908年に発表されたこの論文はいちおう「経済学研究」の「史論」²⁴に属するものとはいえ、全体的にいうと、実際にこの論文を通じて河上のあまり得意でない「人類学」の分野の議論に参加しようとし、その主旨はモースの日本古人の食人風習説を「論破」するところにあった。²⁵

モース論文と河上肇論文との間隔は30年あるが、30年も隔てた異なる分野の人よりわざわざ2万字余りの長文をもって反論されたこと自体が、モースの影響そのものを物語っているであろう。

それ以外に、原亀太郎(1861-1894)と岸清一(1867-1933)の『漂流迫餓食人』²⁶と穂積陳重(1856-1926)の『隠居論』²⁷があって、「食人」言説を法律学の範疇にまで持ち込んだ。とりわけ後者に載せられた材料を上述の河上肇の論文は引用している。

要するに、「食人」という言説は、新聞や文学作品などを介して明治時代全体を貫く「興味」として一般社会で続いていたと同時に、学術問題としても考古学、進化論、生物学、人類学、民族学、社会学、法律学、更に文明論などの広範な領域で展開されたのである。モースがこうした展開に有力な契機を与えた。この前提のもとで、一つ具体的な問題として、明治時代の「食人」言説にかかわる「支那」という存在が浮き彫りになった。

V. 「支那人人肉ヲ食フノ説」

明治時代の「食人」言説全体のなかにおいて、いわば「支那人人肉ヲ食フノ説」というものはかなり大きな比重を占めた。ある方面から見れば、中国の歴史上、資料が大量に存在すること自体が、「食人」という話題あるいはそれに関する討論に豊富な素材を提供したとも言えよう。事実、モースが昔の日本には「食人種ありき」という推定をした後、それに対する最初の反応であると思われるのは「支那人人肉ヲ食フノ説」を題とし、明治十四(1881)年12月に発行された『東京学士会院雑誌』第三編第八冊に掲載された神田孝平(1830-1898)の論文である。

神田孝平は明治時代の第1世代の、官も学も兼ねた知識人エリートの1人であり、『明六雑誌』に名を見せ、「財政」、「国楽」、「民選議院」、「貨幣」、「鉄山」などの各種の論を幅広く展開した²⁸だけでなく、のちに「東京学士会院」創立者の一人²⁹として、「副会長」と「幹事」³⁰の「重役」を担い、明治開化期の啓蒙に重要な貢献をした人物である。一時的に、その「単行本はいずれも翻訳書で」、「官」としての「職責上の産物である」と評されたが³¹、最近、西周の再評価と関連に、その「西洋経済学の移植者」としての貢献も評価されている。³²本論との関連事項としては、何よりも「人類学会」の設立にかかわることであろう。坪井正五郎らの若い学生たちが「人類学会」の創立を準備する際にあたって、彼は「兵庫県士族」の身分で『人類学会報告』の「編集并出版人」としてそれを奨励し支援した上、その後、延べ39点の文章を同誌に載せ、近代における日本「人類学」の草分け期の力強い推進者となる。³³

「支那人人肉ヲ食フノ説」は神田孝平の重要な論文であり、モースの報告に直接的には触れていないが、それに対する間接的な応対であろうと思われる。³⁴そこから提起した問題は、「未開ノ蛮民中ニハ人肉ヲ食フ者往々コレナリ怪シムニ足ラス、支那ノ若キハ夙ニ文明ノ国ト称シ道徳仁義ヲ以テ高く自称スル者ナリ、而カルニ古来史中人肉ヲ食イシコト続々トシテ絶エス」ということについて、どう説明すべきか、ということである。これは確かに新生の人類学が新たに直面した問題にとどまらず、歴史学、社会学乃至文明論の直面しなければならない問題であった。38年後、中国の五四新文化運動期において、呉虞が魯迅「狂人日記」に話題を借り、「食

人」と「礼教」を中国歴史上対立しながら並行するものとして問題提起したが、³⁵その発想はまさにこれと軌を一にする。しかし、神田孝平は同論文の中で上述の設問にはもともと答える気がなかったようで、「食人」の方法、事実、およびその原因についてのみ強い関心を見せている。したがって、同論文はかかる文献の大量引用を一つ特徴ともすることになったといえる。全文2600字余りであるが、「食人」例証の引用が23回に達し、平均的に約百字に1例があり、文献学の方法を人類学分野に導入したにとどまらず、歴史的資料として新たな参照大系を提供し、それ以後の「支那人人肉ヲ食フノ説」の「基本形」というべきものを構築し、研究全体に大きな影響を与えた。今1節を引用し、その一斑を示す。

支那人人肉ヲ食フ者實ニ多シ、然レトモ之ヲ食フ源由ハ一ナラス、飢ニ因リテ食フ者アリ、怒ニ因リテ食フ者アリ味ヲ好ミテ食フ者アリ病ヲ医スルカ為ニ食フ者アリ」調理ノ法モ亦種々アリ、細カニ截リテ生ニテ食フヲ饈ト云、我邦ニテ所謂サシミノ如シ、乾シテ燥シタルヲ脯ト云、我邦所謂干物ナリ、烹テ羹トナス者アリ蒸シテ食フ者アリ而シテ最多キハ醃ナリ、醃トハ肉醬トモ注シ、又先ツ其肉ヲ膊キリ乾シ而ル後ニ之ヲ莖ミ、雜フルニ梁麩及塩ヲ以テシ、漬スニ美酒ヲ以テシ、瓶中ニ塗置スル百日ナレハ則成ルトモ注シタレハ大略我邦ノ小田原製ノ塩辛ノ如キ者ナルヘシ」。今最易近ナル史ヨリ最著明ナル事例数件ヲ引鈔シテ以テ参考ノ資ニ供セン、支那史中ニテ人肉ヲ食フシコトノ最古キハ殷ノ紂王ナルヘシ、史記ニ捫ルニ殷紂九侯ヲ怒リテ之ヲ醃ニス、鄂侯之ヲ争フ、并之ヲ脯ニストミエタリ、是ハ有名ナル暴君ノ怒ニ乗シタル所行ナレハ其尋常ナラサルハ勿論ナレトモ、平生人肉ノ味ヲ嗜ミ之ヲ食フニ慣ルタニ非サレハ、安ソ之ヲ醃ニシ之ヲ脯ニシ貯ヘテ食用ニ充ツル等ノコトアランヤ。以テ当時ノ風俗ニ於テ人肉ヲ食フヘキ者トシ嗜ミテ之ヲ食ヒシコトヲ徴スヘキナリ」其後齊ノ桓公亦人肉ヲ食ヒタリ……（下略）……

以後、日本や中国或いは世界各国の古い文献に新たな「食人」の例証を求める研究は「神田孝平」に明確に言及するか否かにかかわらず、神田のこの一文に触発されたものがほとんどである。「支那」関係に限って、神田孝平を含めて、重要なものは次の通りである。

(1) 神田孝平「支那人人肉ヲ食フノ説」、『東京学士会院雑誌』第3編第8冊、明治十四（1881）年十二月

(2) 穂積陳重『隠居論』、哲学書院、明治二十四（1891）年

(3) 寺石正路『食人風俗考』、東京堂、明治三十一（1898）年

(4) 南方熊楠「The Traces of Cannibalism in Japanese Records」（日本の記録に見える食人の形跡）、明治三十七（1903）年3月17日、イギリス『ネイチャー』への投稿であるが、未発表。³⁶

(5) 芳賀矢一『国民性十論』、東京富山房、明治四十（1907）年

(6) 桑原鷲蔵「支那人ノ食人肉風習」、『太陽』第25巻7号、大正八(1919)年

(7) 桑原鷲蔵「支那人間に於ける食人肉の風習」、『東洋学報27』第14巻第1号、東洋学会、大正十三(1924)年7月

南方熊楠を除いて、神田孝平以後の研究テキストには2つの共通点がある。すなわち、神田孝平の例証について改めて引用したり補充したりするのが一つ、「人肉ヲ食フハ支那固有ノ風習」を持続的に論証したり確認したりするのがいま一つである。「図の2」は関連文献にみる「支那」の例証を統計する対照表である。

表の2： 各文献に見る「支那」例証の対照表		
著者と発表年	例証数	説明
(1) 神田孝平1881	23	史記、左伝、五雜俎の初例示
(2) 穂積陳重1891	10	日本と世界各地の事例
(3) 寺石正路1898	23	日本と世界各地の事例
(4) 南方熊楠1903	0	著者と文献名だけ：神田孝平、雷诺、水滸伝、辮耕録、五雜俎
(5) 芳賀矢一1907	12	資治通鑑4例、辮耕録8例
(6) 桑原鷲蔵1919	22	1924年完成版の原形論文
(7) 桑原鷲蔵1924	200以上	中国文献だけでなく、対照用の西洋文献も引用
合計	288	

(1) について。神田孝平の貢献は人々に中国古代文献における記録を気づかせたことにあり、彼に引用された『史記』、『左伝』、謝肇淛の『五雜俎』などは後の論文の必ず引用する文献となり、40年後も、桑原鷲蔵が彼の開拓的貢献を高く評価するところとなる。(2) について。上に述べたように、穂積陳重の『隱居論』は近代「法理学」の角度から日本古来の「隱居」について研究した専門書である。いわゆる「隱居」は具体的に老人が社会生活から退出するを指し、老人の扶養と家族制度にかかわる問題として同書により提起された。その第一編「隱居起原」は第一章「食人俗」、第二章「殺老俗」、第三章「捨老俗」、第四章「隱居俗」の4章に分かれるが、これらの見出しだけでもわかるように、老人が「隱居」に入ることができる時までに、その多くは捨てられたり食われたりする運命に遭遇するというのを論述するものである。第一編は10箇所で「支那」の例証を引用しているが、その配列は「支那」を特別扱いせず、日本及び世界各国の例証といっしょにあつまっている。上に紹介した河上肇の「食人論」(1908)は、「支那の食人俗に就て未だ詳ならず」³⁷として、数箇所もこの『隱居論』の例証を引用する。(3) について。『食人風俗考』は寺石正路が以前に『東京人類学会雑誌』に掲載した2篇の論文をもとにして、さらにそれを整理し、拡充した専門書であり、明治時代の「食人風俗」に関する研究の最も体系的、理論的専門書である。そのなかで、「支那」から採ってきた23例を、日本及び世界各国の例証に取り混ぜて組み組んでいる。ちなみに、同書は日本の文献からの最も多い

事例を採集した研究書でもある。(4)について。南方熊楠(1867-1941)は日本近代の博物学者および民俗学者として有名であるが、モース、穂積陳重、寺石正路などの先行研究に導かれて「食人研究」に対しても濃厚な興味を持ち、1900年3月に「日本人食人肉事」³⁸を調査し始め、6月に論文「日本人太古食人肉説」をまとめ、「引用書数七十一種也(和二二、漢二三、英十六、佛七、伊三)」³⁹という。上記論文は彼の帰国後イギリス『ネイチャー』雑誌に投稿したもので、未発表であったが、日本の「食人」研究史においては重要な1篇である。南方熊楠は日本で数少ないモースの見解を支持した学者の一人で、日本の「食人」文献を調査するにあたって客観的な態度を持ち、中国に対しても同じく、文化上、人種上の偏見がまったくないので、ほかのものとの対蹠的な存在となる。(5)について。芳賀矢一が「支那」の12例を提示したが、その表題が示すように、その「論」の意図は「人類学」あるいはその他の学問分野にはなく、いわゆる「国民性」を論じようとするところにあるというわけで、「食人風俗」を「国民性」論に導入する重要な文献として注目すべきである。魯迅と明治時代の食人言説との間の橋渡しとなるものである(後述)。(6)と(7)は、歴史学者である桑原鷺蔵(1870-1931)の専門的な研究論文で、魯迅の「狂人日記」より遅いものとしてここに並べるのは、やはり彼が明治から大正までの「支那人肉を食うの説」の集大成者であるためである。自分の研究が同分野において神田孝平に直属するのを彼は自ら認めていた。

支那人間に於ける食人肉風習の存在は、決して耳新しい問題でない。南宋の趙與時の『賓退録』、元末明初に出た陶宗儀の『輟耕録』を始め、明清時代の支那學者の隨筆、雜録中に、斷片的ながらこの食人の史實を紹介し、若くば論評したものが尠くない。日本の學者でこの史實に注意したものも、二三に止らぬ。就中『東京學士會院雜誌』第三篇八冊に掲載されてある、神田孝平氏の「支那人肉ヲ食フノ説」の一篇が、尤も傑出して居る。傑出はして居るが、勿論十分とはいへぬ。⁴⁰

神田孝平の「十分とはいへ」ないながら「傑出」している先行研究があったからこそ、桑原鷺蔵の「前人の所論に對」する「可なりの進歩」があるわけで、後者がさらにヨーロッパ人の記載について「正確なることを證明し、且つその所傳の事實に解釋を加へる」ととどまらず、「同時に支那人の食人肉の風習を、歴史的に究明」⁴¹しようするのである。例証の数が200以上もあり、神田孝平の8倍に相当し、これまでの例数の合計よりもはるかに超えたのである。

ここまで述べてきたように、明治時代の「食人」言説における「支那人肉ヲ食フノ説」の例を見れば、それが神田孝平から始まり、桑原鷺蔵で完成し、主に中国資料に記載された事例を調査・整理した上で、事実認証も行い、一つの「支那人食人」説の枠組みを構築したのがわかった。のちに『魯迅全集』(16巻,人民文学出版社,1981年)のなかで触れられた事例としての「食人」は基本的にこの言説範囲を超えるものではない。小説「藥」に描かれた「人血饅頭」でさ

えもこの範囲に含まれているので、⁴²「狂人日記」の「食人」というイメージがこの枠組みの中で生まれるのも何の不思議もないであろう。

VI. 芳賀矢一の『国民性十論』

上述の文献の中で、芳賀矢一(1867-1927)の『国民性十論』だけが討論の重点を「食人風習」に置いていなかったが、もしかすると、この書が魯迅を中国歴史上の「食人」事実へと注意を喚起した重要な文献であったかもしれない。

文字通り、「国民性」を問題として論じた著書であるが、むしろ一種の「日本人論」と呼ぶべきであろう。明治に四十(1907)年12月に東京富山房より出版されてから、すぐにベストセラーになった。本論文の用いるテキストはその奥付に「明治四十四年九月十五日八版」と記すものである。かりに世界中「日本人ほど自らの国民性を論じることを好む国民が他にない。日本人に関する著書・論文・記事はすでに数え切れないほど」多いというならば、『国民性十論』は近代以来長い「国民性」論の歴史の中で重要な位置を占める1冊で、かねてから高く評価され、その影響は今日に至るまでなお存在する。⁴³

「国民性」問題は日本においては近代民族国家誕生以来、ずっと議論されてきた問題である。一つ概念としては、明治初期からあり、ただ時期によってその言い方が変わるだけである。例えば、『明六雑誌』では「国民の気風」とか「人民の性質」とか言い、「国粹の保存主義」の明治二十年代には「国粹」といい、三十年代になると「日本主義」と言ったが、日清戦争から日露戦争までの10年のあいだに、ようやく「国民性」という語に定着するというわけである。最初に「国民性」という語を文章の題目に用いたのは文芸評論家である綱島梁川(1873-1907)の「国民性と文学」である。『早稲田文学』明治三十一(1898)年5月号に掲載されたこの一文は「国民性」を使用する回数が48回に達し、一挙にそれを定着させた。そして、はじめて「国民性」を著書名に使ったのは、まさにこの10年後出版された『国民性十論』である。それ以後、魯迅の日本留学時代から、「国民性」が一語彙として中国語に入り始め、いわゆる「民族国家」思想と共に一挙に日本留学生の中で広がっていった。その詳しいことは、筆者の関係論文を参照。⁴⁴

芳賀矢一は近代日本の「国文学」研究の重要な開拓者である。東京帝国大学国文科を卒業し、1900年同国文科助教授としてドイツへ留学し、2年後の1902年に帰国し、東京帝国大学国文科教授に就任した。はじめて国文学の分野に西洋「文献学」方法を導入し、「国文学」を近代的学問に転換させた人物である。主要な著作は『考証今昔物語集』、『国文学史十講』、『国民性十論』などのほか、多種の日本文学作品集を校訂・編集した。死後、その「相継人」芳賀壇と教え子らの整理・編集による『芳賀矢一遺著』に含まれている『日本文献学』、『文法論』、『歴史物語』、『国語と国民性』、『日本漢文学史』⁴⁵によって、彼の残した研究面の業績を窺うことができる。

『国民性十論』は芳賀矢一の代表作の一つであり、その内容は東京高等師範学校での連続講演から成り、明治四十（1907）年12月に富山房から出版された。これは日本近代思想史において、「近代日本」が「日清・日露」二つの勝利を経験したあとの「自意識」を見せた重要な1冊であるといえる。世界に向かって日本人がどのような国民なのかを説明するよりも、むしろ自国の国民に日本人としてどんな「国民性」であるべきかを力説するものなので、その主旨は、新しい歴史的環境のなかで如何に「国民の特性を發揮」⁴⁶するかを論じるところにある。

全書は「序言」と「結語」を除いて、「一 忠君愛国」、「二 祖先を崇び、家名を重んず」、「三 現世的、實際約」、「四 草木を愛し、自然を喜ぶ」、「五 樂天洒落」、「六 淡泊瀟灑」、「七 織麗織巧」、「八 清淨潔白」、「九 禮節作法」、「十 温和寛恕」という10章に分けてその国民性論を展開する。「我民族の美德の底には」潜んでいる「缺點」を回避しないが、主に美点を討論するので、日本の国民性について積極的・肯定的に陳述する、いわば「作成的」な傾向が明らかにある。「支那」の「食人時代の遺風」の事例がこういったような文脈のなかで導入され、「十 温和寛恕」の章に現われた。その事例にかかわる前後文を含む段は次のようである。

異人種に對しては日本はむかしから寛容である。隼人屬も、熊襲族も、歸順すれば之を寛容する。神武天皇は弟猾、弟磯城の歸順を容れられて弟猾を猛田縣主、弟磯城を磯城縣主となされた。八幡太郎義家の宗任に於ける關係と同じである。朝鮮人や、支那人の歸化したのはむかしから之を入れて來た。百濟の亡びた時には男女四百餘人の歸化人を近江國におき田を給せられ、翌年には二千餘人を東國に移し、皆官食を給つたとある。靈龜二年には高句麗人千七百九十人を武藏の國に移し、高麗郡を置いた事が見えて居る。かういふ例は史上にいくらかみえて居る。姓氏録には蕃別の氏姓が澤山にある。みだりに降服人を殺害したり、鑿殺したりした例は無い。恩を以て懷けて心底から歸服させる様に仕向けるのが、日本の古來の仕來りである。白起が趙の降率四十萬人を坑にすといふ様な慘酷な事は日本歴史にはみえぬ事である。支那の歴史をよめば人の肉を醃や羹にして食つた事がみえる。食人時代の遺風であらう。

支那人の人肉を食つた例は珍しくない。資治通鑑唐僖宗中和三年の條に、「時民間無積聚賊掠人爲糧。生投於碓磑併骨食之號給糧之處曰舂磨寨」とある。確に入れて舂いて食つたのである。まるで地獄の圖その儘である。翌年にも「軍行未始轉糧車載鹽戶以從」とある鹽戶は死人の鹽漬である。又光啓三年の條にも宣軍掠人。詣肆賣之。軀縛屠割如羊豕訖無一積骸聲。流血滿於坊市とあるのは實に人間の所行ともおもはれぬ。明の陶宗義の輟耕録には、

天下兵甲方殷而淮右之軍嗜食人。以小兒爲上。婦女次之。男子又次之。或使坐兩缸間外逼以火。或於鐵架上生炙。或縛其手足先用沸湯澆澆。却以竹帚刷去苦皮。或乘夾袋中入巨鍋活煮。或刳作事件而淹之。或男子則斷衰雙腿。婦女則特

剗^二其^一兩腕^一酷毒萬狀不可^二具言^一。總名曰^二想肉^一。以^二爲^一食^レ之而使^二人想^レ之也。此與^二唐初朱粲以^レ人爲^レ糧置^二搗磨塞^一謂^二啖醉人^一如^レ食^二糟豚^一者^レ無^レ異固在^二所^一不^レ足^レ論。とあるが、これらはいづれも戦争糧食の乏しい苦しまざれであるが平時に於ても食ふに至つては驚くべきことである。同書に

唐張鷟朝野僉載云。武后時杭州臨安尉薛震好食^二人肉^一。有^二債主及奴^一。詣^二臨安^一。止^二於客舍^一飲^レ之。醉並殺^レ之。水銀和飲。并^レ骨銷盡。後又欲^レ食^二其婦^一。婦知^レ之踰^レ牆而逃。以告^二縣令^一云々

とあるのをはじめとして種々の書から人肉を食つた例をあげてある。張茂昭、葛從簡、高濃、王繼勳等いづれも顯官でありながら人肉を食つたのである。宋の金狄の亂には盜賊官兵居民交々相食つたのといふので、其時の隱語に、老瘦男子をば饒把火といひ、婦人小供をば不美羹といひ、小兒をば、和骨爛といひ、一般には兩羊脚といつたとある。實に驚き入つた次第といはねばならぬ。之によれば明時代までも人肉を食つた例がある。是雖^二人類^一而無^二人性^一者矣と著者が評して居るのは當然の事である。

兵士が戦捷に乗じて婦女を辱め奪略を恣にする様な事は日本には決して無い。日露戦争に先だつて露西亞の將軍が滿州の人數千人を黒龍江に驅つて殺した事は皆人の記憶に新なところである。西班牙人が南アメリカを征服したときなどは最も慘酷な話に富んで居る。白人は異人種の考を以て向ふから、黒人などび對しては殆ど人類としては取扱つて居らぬ。むかしの羅馬人は俘虜を驅つて禽獸の餌食としたが、露西亞の猶太人虐殺などは今でも行はれて居る。白人は慈愛を説き人道を論じながら、最優人種との先入思想に驅られて其他の人種をば人を人とおおもはぬといふ謬見がある。學者の著述にも「アリヤン人及び其他の有色人」などと書いて居るのがある。日本はむかしから國內の争で、全く他人種との衝突が無いから、自ら慘酷の事が無いとの原因もあらうが、日本人の率直、單純な性質は何事でもあまり極端に走らぬのであるから、極度の慘酷は其心に堪へぬ所である。⁴⁷

上に述べられたように、「残酷」の事例は世界各国にあるもので、「支那」のほか、ロシア、スペイン、古代古羅馬のもあるが、「支那」のほうだけが最も多くなおかつ具体的である。国文学者として、芳賀矢一は漢籍について熟知していたし、日本初の『日本漢文学史』は彼の著すものであるが、ここで「支那」の事例を取り上げるのは、やはり明治以来の「食人」言説のある種の継承であろう。とはいえ、資料の取り扱いにおいてこれまでの「人類学」と比べると、やはり芳賀矢一の特徴がはっきりと見える。たとえば、四つの例も採ってきた『資治通鑑』は過去の「食人」にかかわる研究論文に全く触れられなかったし、8例を採ってきた『輟耕録』の引用も、過去の同じく『輟耕録』から事例を採る穂積陳重(1891;1例)と寺石正路(1898;3例)よりもはるかに多い。だが、いくつかの点についてさらに補足する必要がある。

その一。近代のいわゆる「人種」、「民族」または「人類学」などの研究は、最初から「進化論」や「民族国家」などの理論と暗合する因子があって、その「研究成果」あるいは使われた事例は「国民性」の議論へ持込みがちなので、文化上の偏見を生みやすい。例えば、明治三十七（1904）年に出版された『野蠻ナル露国』は、日露戦争の前夜のロシアを「食人種に近し」⁴⁸として表現する。芳賀矢一が「食人時代の遺風」を持って来て日本国民性の「温和寛恕」の「美德」を比較するのも、この方面の顕著な例証であると言える。しかし、このため、逆に「食人研究」がすべて「人種的偏見」を持つものと見なすべきでないこともまた注意しなければならない。こういう意味から、南方熊楠が明治に三十六（1903）年にまとめた研究論文は非常にあり難いと言えるであろう。残念ながら、何らの偏見とも無縁のその論文はけっきょく「人種的偏見」によって扼殺されてしまったのである。⁴⁹

その二。『国民性十論』の中で、意識的であるか否か不明としても、芳賀矢一はすでに知られているはずの本国の文献に記載された「食人」事例を回避し、たとえ触れても当たり障りのないことを言うだけ済ませている。いわば「アンバランス例証」であるが、この点も見逃すことができない。

その三。「食人風習」が「支那人国民性」の1部として存在するとすれば、それに「支那」そのものをけなす意味が与えられるのは当然なことである。この点について、魯迅ものち気づいた。例えば彼は1929年、世界へ紹介された中国と日本のアシンメトリーについて、「ただ、ふと思いついたことだが、中国にいる外国人は、経書や子書を翻訳するのはいても、今日の文化生活——水準はともかく、とにかく文化生活にはちがいない——をまじめに世界に紹介する者はめったにいない。ある学者連中などは書物の山のなかに、食人風俗の証拠を探し出そうとやっきになっている。この点に関して言えば、日本のほうが中国よりずっと恵まれており、つねに日本のいいものを宣揚してくれる外国人がいて、彼らがまた外国のいいものを整然と吸収するよう導いている」⁵⁰と述べた。魯迅は「ある学者連中」の「書物の山のなかに、食人風俗の証拠を探し出そうとやっきになっている」態度に賛成しないが、記録に残される「食人」事実の存在そのものは決して否定せず、むしろそこを一つの出発点として中国人の人間性の再建に力を尽くしたのである。

その四。明治時代の言語環境、とりわけ「国民性」に触れる言語環境における「支那」は非常に複雑な問題で、初期はともかく、後年の中国侵略戦争が全面的に勃発してからしばしば見られたような軽蔑・「懲罰」すべき対象ではなかった。事実上、かなり長い間、「支那」は日本の時機と情勢を推し量る重要なメルクマールとされたのである。例えば、『明六雑誌』では「国名と地名」として「支那」という語を使用する頻度は、ほかのいかなる国名と地名よりも遥かに多く、たとえ当時の主要な「学ぶ」対象国である「イギリス」や本国「日本」にしても、それと比べることができないほどである。これは「他者」としての「支那」が、まだ完全に「日本」以外に独立してなく、「日本」の内に含まれているからであったろう。そのため、西洋各国

を以って「支那」と対比することは、ある意味で自分自身との比較を意味し、「支那」についての反省と批判が、部分的に自分自身に対する反省と批判に当たるのを意味していた。この点は西周の「百一新論」の儒敎批判、中村正直(1832-1891)の「支那」を弁護する「支那不可辱論」(1875)、さらに福沢諭吉(1834-1901)『学問の勸め』(1872)、『文明論概略』(1877)などから窺うことができる。ある意味でいえば、のちのいわゆる「脱亜論」はまさにこの「支那」を「他者」として自分自身の中から排除しようとする文化上の結論であった。芳賀矢一の『国民性十論』のなかの「支那」が演じたのは、こうした自分自身の中から完全に取り除ききれなかった「他者」の役割であった。日本以外の「国民性」としての参照的な意味合いのほうが、明らかに意図的に攻撃する意味合いより大きい。少なくとも客観的に日本が「支那」と「印度」の文化を導入してから如何に自分の需要に適合させてきたかという歴史の過程を論じている。このような「国民性」の文脈下で、「食人」はある種の事実として若き周樹人、のちの魯迅の視野に入ったではなかろうか。

Ⅶ. 魯迅と『国民性十論』

芳賀矢一は有名な学者であり、『朝日新聞』には1892年7月12日から1941年1月10日までの関連記事、紹介、広告などが337条あり、『読売新聞』には1898年12月3日から1937年4月22日までの関連記事などが186条ある。「文学博士芳賀矢一新著『国民性十論』も「青年必読之書、国民必読之書」⁵¹として文字どおりのベストセラーで、1907年末の初版から1911年までの4年のうち「第八版」⁵²も発行された。新聞広告も頻出し、長いこと継続した。おまけに、たとえば『読売新聞』の「芳賀矢一博士の洋服代「国民性十論」原稿料から差し引く」⁵³のような出版に関する「エピソード」までも登場した。

このような状況のなかで、『国民性十論』が周氏兄弟に気づかされるのもごく普通のことであろう。『周作人日記』によると、彼が『国民性十論』を購入したのは1912年10月5日である。⁵⁴筆者はかつてほかの文章で、1923年の仲が悪くなる、いわば「兄弟失和」までは、二人の購入書と蔵書がお互いの「目睹書」と見なしてもよいと指摘したが、⁵⁵『国民性十論』も兄弟ともに享受した一冊として、2人にどちらも大きい影響を与えたにちがいない。魯迅は「小説から民族性をみるというのも、なかなかよいテーマだ」⁵⁶と言ったが、もしもここでいう「小説」を普通の「文学」に置き換えれば、『国民性十論』が提供したのは一つよい見本といえるであろう。この著書の中で、芳賀矢一は国文学者の本領を充分に発揮し、「文献学」学者としての学識を見せた。その論に組み立てた数百以上の典故・事例などは、日本神話、伝説、和歌、俳句、狂言、物語から来たものが大半を占めるほか、歴史記録、佛典、禅語、筆記類などをもって補足し、「文化史的な観点から従来似なかった詳しい国民性論を展開した」。⁵⁷この点は、周氏兄弟に共通の影響を与えたと考えられる。

魯迅の弟の周作人にとって、事実上、この本は彼の日本文学史、文化史、民俗史に関する重要な入門書の一つで、その痕跡はのちに彼の日本文学についての研究、論述および翻訳などに残っている。「日本の詩歌」、「遊日本雑感」、「日本窺管」、「元元合唱集」、「『日本狂言選』後記」などで見られるように、周作人は何篇かの文章のなかで芳賀矢一について引用したり言及したりするにとどまらず、絶えず芳賀矢一の本を購入している。これまでに知られているのは1912年『国民性十論』に続いて、『新式辞典』（1922購入）、『国文学史十講』（1923）、『日本趣味十種』（1925）、『謡曲五十番』（1926）、『狂言五十番』（1926）、『雪月花』（1933）などである。全体的に言えば、「文学」から「国民性」への展開という大前提のもと、周作人の受けた影響が主に日本文学および文化研究方面に見られるのに対して、魯迅の受けた影響は主に「国民性」の方面に見られる。具体的に言えば、芳賀矢一の日本国民性論が魯迅に中国国民性に関する種の思考を喚起させ、とりわけ中国歴史上の「食人」の事実に注意を向けさせたのである。

魯迅全集には「芳賀矢一」という人名がない。この点は周作人が一一との「記帳」していると完全に異なる。しかし、言及していないことは、読んでいなかった、または影響を受けていなかったということではない。事実、「魯迅目睹書」のなかには、彼がまったく言及していないにもかかわらず、たしかに読んでその影響を深く受けた例が少なくない。⁵⁸芳賀矢一の『国民性十論』もこのようなケースに当てはまるが、ここでの問題は「食人」に関する事実告知に集中する。

「狂人日記」発表後の1918年8月20日、魯迅は許寿裳宛ての手紙で、「たまたま『通鑑』を読んでいて、中国人はやっぱり人食い民族であったと悟り、これでこの作品を書いたわけです。こうした発見は関係するところもはなはだ大なのに、知る者はなお寥寥たるものです」⁵⁹と言っている。つまり、中国の史書には「食人」の記録が多くあるものの、「狂人日記」を発表する時点では、そうした事実を気付いた人がめったになくて、「中国人はやっぱり人食い民族であった」と意識する人が少ないというのが魯迅の認識だったのであろう。魯迅は「寥寥たる」「知る者」の一人で、自分が「たまたま『通鑑』を読んでいて」、「悟った」というわけを親友の許寿裳に告げたのである。こういう言い方に沿って考えれば、『資治通鑑』の「食人」の記述が、「狂人日記」の「食人」イメージの創出の直接のきっかけとなって、作品の主題を芽生えさせるのに重大な影響を持っていたにちがいない。

そこで、魯迅の読んでいたのが『資治通鑑』のどの版本なのか問題になろうが、それは再調査を待たなければならない。いま現在、魯迅と同時代またはやや早い時期に中国と日本で刊行されていたいくつかの『資治通鑑』の版本を確認することができる。⁶⁰しかし、『魯迅蔵書目録』には、『資治通鑑』は見当たらない。『魯迅全集』の『資治通鑑』に言及するところは、すべて書名で、「食人」などの記載にいっさい関わっていないので、単に魯迅の言い分を根拠にして、彼の「たまたま読んでいた」のはどの「食人」に関する記載なのかは判明不可能である。付言すれば、魯迅日記に『資治通鑑考異』を借覧し（1914年8月29日、9月12日）、そして

購入する(1926年11月10日)記録があり、魯迅の蔵書のなかにもこのワンセット30巻の書物が確かに含まれている。⁶¹『中国小説史略』と『古籍序跋集』から、魯迅が『資治通鑑考異』をこの二書の材料として用いたのがわかるが、「食人」の話とは関連していない。

そのため、魯迅が『資治通鑑』を直接に閲読した可能性を排除しない前提のもとに、次のように推定してはいかがであろうか。すなわち、魯迅がその時「たまたま読んでいた」のは『資治通鑑』原本ではなく、『国民性十論』の言及した『資治通鑑』中の4つの事例だった可能性である。さらに言えば、魯迅が『国民性十論』における「『資治通鑑』」から逆に『資治通鑑』原本に辿り着いたことも不可能ではなかったと推測してもよいであろう。ただ、繰り返せば、魯迅のテキストそのものからは、彼が実際に『資治通鑑』を閲読した証拠は探し出せない。

その他に、芳賀矢一が8つもの例を採集したもう一つの文献、陶宗儀の『輟耕録』について、魯迅は2度言及しているが、いずれも単なる文学史料としての扱いで、「食人」史料として引用したわけではなかった。⁶²「日本の堀口大学の『フィリップ短編集』の中から」訳出したシャルル・ルイ・フィリップ(Charles-Louisphilippe, 1874-1909)の「食人人種の話」と「神魔小説」資料としての文学作品の「食人」の例を除くと、魯迅は文章の中で具体的な歴史上の「食人」例をただ一つ挙げるにとどまる。それは「抄靶子」のなかで言及した「二本足の羊」である。「黄巢は謀反を起こしたときには、人間を食糧にしたが、彼が人間を食べたというなら、それは間違いである。彼が食べたのは、『二本足の羊』というものであった」⁶³という一文である。1981年版『魯迅全集』の注釈はこれについて、これが黄巢の事績ではないと訂正し、さらにその材源を指摘して、「魯迅が引用したこの話は、南宋莊季裕の『鷄肋編』から出ている」という。この訂正と故事の出典についての指摘はどちらも正しいが、さらに一点を加えたい。つまり、元末明初の陶宗儀が『輟耕録』中で『鷄肋編』の「二本足の羊」の話をそのまま写したということである。芳賀矢一は『輟耕録』を閲読するに当たってこの事例を見、自らの著書に引用したことは、上述のとおりである—「宋の金狄の亂には盜賊官兵居民交々相食つたのといふので、其時の隱語に、老瘦男子をば饒把火といひ、婦人小供をば不美羹といひ、小兒をば、和骨爛といひ、一般には兩羊脚といつたとある」と。管見によれば、魯迅の「二本足の羊」に関する記憶の曖昧さは、おそらく直接的に『鷄肋編』あるいは『輟耕録』から来たものではなく、芳賀矢一の著書から与えられたものであると考えるのが妥当ではないかと思う。

Ⅷ、「食人」——事実から作品へ

「狂人日記」なかの「食人」は、変化し発展しつつあるイメージである。現実世界の「食人」から精神世界の「食人」へ昇華し、さらに精神世界の「食人」から逆に現実世界の「食人」へと反転する。現実世界と精神世界とは相互に転換し融合し、物思両界を横断し、古今を縦断する「食人」の一大世界が構築される。主人公の「食う」、「食われる」、もしかしたら自分も

同じく一緒に食ったかもしれない。この「大恐惧」はこのような世界の中で発生する。さらに、主人公の「狂」がこの「食人」世界の恐怖を読者に透析し、読者を覚醒させるのである。ここに作品成功のかがみがある。

文学作品の創作はととても複雑な過程であり、いかなる解析も円満に答えることができない課題である。研究者が提供できるのは、まず創作過程に近い基本的な事実であるべきで、次はその上での論証、分析と判断であろう。「狂人日記」の誕生にあっては、少なくとも不可欠な2つの基本的な要素があった。一つは実際に発生した「食人」事実そのもので、もう一つは作品の形式である。

本論で明らかになったように、魯迅が小説「狂人日記」を発表するまでに、近代中国に「食人」研究史は存在していなかった。呉虞は「狂人日記」を読んではじめて彼の有名な「食人」の考証を始めたが、それもただ8例を挙げるに過ぎない。上述のように「食人」という言説とその研究はまず明治維新以後の日本で展開したのである。西洋の宣教師たちが世界各地から送り返すcannibalismに関する報告、進化論、生物学、考古学、人類学および近代科学哲学の導入などは、「食人族」と「食人風習」への関心を引き起こしたが、この段階では、「支那」は広範に採集められてきた世界各国・各人種の事例の一つとして登場し、文明の発達している人種の「食人」の実例を提供することとなったのである。やがて、資料の豊富さが原因であろう、「支那」は次第に別格とされ、「食人の風習」における「支那」から「支那人食人風習」となり、さらに「支那人食人風習」が「支那人の国民性」の一部と見なされるようになった。これはむしろ日本近代思想史の問題である。魯迅はまさに日本思想史のなかのこの言説とその流れの場に立ち会い、そこで二つの啓発というべきものを受けたと考えられる。一つは歴史上の「食人」事実の確認、ないしは少なくともそれを確認するための一つの手かかりを獲得した。すなわち「悟る」である。もう一つは、「中国人はやっぱり人食い民族であった」という発見を「国民性改造」の思考回路に組み入れたことである。

それ以外に、現実のなかで実際に発生した「食人」の事実もちろん作品を創出する不可欠な要素であった。徐錫麟と秋瑾はどちらも魯迅の周辺にいた例で、前者は本名で「狂人日記」に書き込まれ、後者は「夏瑜」という名で「薬」に入った。「易牙が自分の息子を蒸して、桀紂に食べさせた、……ずっと徐錫林まで食いつづけ」、再び「徐錫林から」「饅頭に血をひたして舐めました」というふうには、「狂人日記」の「四千年の食人の履歴」は、このような歴史と現実的な「食人」の事実が複雑に結合された上で作り上げられたのである。

いま一つの不可欠の要素は作品の形式である。本論の冒頭に述べていたように、魯迅は日本語訳のゴーゴリの「狂人日記」を通じて、1種の出来合いの表現形式を獲得した。

「今日は余程変な事があった。」「阿母さん、お前の倅は憂き目を見てゐる、助けて下され、助けて！……（中略）……阿母さん、病身の児を可哀そうだと思ってください！」⁶⁴魯迅が自分の「狂人日記」の第一行「今夜は、いい月だ」と最後の一行「子供を救え……」を書いた時、

心に浮かべているのは恐らく二葉亭四迷によって与えられたゴゴリのこれらのセンテンスであろう。

同じ時期の留学生の中で、明治時代の「食人」言説に気付いたり、「狂人日記」の二葉亭四迷の訳本を読んだりした者は、恐らく「周樹人」だけではなかったであろう。しかし、そのなかの一人であった周樹人のみは、そのすべてを心に深く刻み込んだ。まさにいわゆる「心有靈犀」といふべきか、その後数年の反芻と下準備を経て、「狂人日記」がその手で書かれ、「魯迅」という作家が誕生したわけである。ここで強調したいのは、「狂人日記」の誕生は単なる「知識」ないし認識方面的问题にとどまらず、そこには文学者の個性や気質が強く働かず、多くは解明できないが、「狂人日記」という作品の「知的」側面だけに限って言うならば、「周樹人」から「魯迅」への成長する過程をある程度まで覗くことができたのではなからうか。もしかすると、ここに所謂「近代」が「魯迅」という個人のなかで発生した再構造の一例を見てもよいかも知れない。

しかし、ここまで辿りついたら、一つだけははっきりと言えるであろう。すなわち「狂人日記」は主題から形式まですべてが参考と模倣によって誕生したことである——ひょっとして、これは今日まで依然として中国文学の避けて通れない道ではないか。

-
- 1 張夢陽『中国魯迅学通史』全6巻、広東教育出版社、2005年。その「下巻一」の「第13章 阿Q学史」と「第14章 狂人学史」参照。
 - 2 姚錫佩「魯迅初読『狂人日記』的信物——紹介魯迅編定的<小説訳叢>」、北京魯迅博物館魯迅研究室編『魯迅蔵書研究』、1991年。
 - 3 『魯迅全集』第14巻p72, 学術研究社, 昭和六十年。
 - 4 紙面の関係で、各文献のリストおよび書誌情報はここで省略する。今後出版する機会がある時、「付録」という形で文後に付け加える。
 - 5 山田俊造、大角豊次郎『近世事情』五編巻十一, p4。全五編十三巻, 明治六至九(1873-1876)年刊行。
 - 6 石井研堂『明治事物起原』の「牛肉食用之始」の章参照: 橋南堂, 明治四十一(1908)年版 pp403-416; 日本评论社, 昭和五十九(1984)年版, 『明治文化全集・別巻』 pp1324-1333。
 - 7 「五箇条の御誓文」。『太政官日誌』第一冊, 慶応四年。国会図書館近代デジタルライブラリー。
 - 8 西周の知的営みに関する研究の最新到達点は狭間直樹氏の論文である。「西周のオランダ留学と西洋近代学術の移植——“近代東アジア文明圏”形成史: 学術篇」, 『東方学報』第八十六冊, 京都大学人文科学研究所, 2011年8月。
 - 9 (1) 英国西斯比亚著, 日本井上勤訳, 『西洋珍説人肉質入裁判』, 東京古今堂, 明治十六年十月; (2) 東京古今堂, 明治十九(1886)年六月; (3) 東京閨花堂, 明治十九年八月; (4) 東京鶴鳴堂, 明治十九年八月; (5) 東京鶴鳴堂二版, 明治十九年十一月; (6) 東京廣知社, 明治十九年十一月。
 - 10 『人肉質入裁判題』, 明治文化研究会編『明治文化全集』第十五巻, 《翻訳文芸篇》, p30。日本評論社, 1992年。
 - 11 同上。
 - 12 スコット著『寿其德奇談』, 明治十八(1885)年十一月, 内田弥八刊刻。
 - 13 大学館「冒險奇怪文庫」第11, 12編, 明治三十九(1906)年。「羽化仙史著《食人国》, 觉生訳, 保定, 河北粹文書社, 1907年」という中国語訳本があり, 北京師範大学図書館蔵書。

14 出版社不明, 明治四十一(1908)年。

-
- 15 金子之史『モースの「動物進化論」周辺』、『香川大学一般教育研究』11号, 1977年。
- 16 中島長文「藍本『人之历史』」, 『滋賀大國文』, 1978、79年。
- 17 『東京大学文学部英文紀要』(Memoirs of the Science Department, University of Tokio) 第一卷第一部。
- 18 『大森村発見の前世界古器物について』、『なまいき新聞』第三、四、五号, 明治十一(1878)年七月六、十三、二十日。『大森貝塚』「関連資料(三)」, 近藤義郎、佐原真訳, 岩波書店, 1983年。
- 19 矢田部良吉口述, 寺内章明筆記。『大森貝塚』のなかで“食人の風習”という章に当たる。
- 20 『人類学会報告』第一号首頁。明治十九年二月。
- 21 「人類学会略則」。『人類学会報告』第一号, 明治十九年二月。出処同上。
- 22 坪井正五郎「本会略史」参照。出処同上。
- 23 《アイヌ人及其説話》上編, p5。東京文教堂, 明治三十三(1900)年十二月。国会図書館近代デジタルライブラリー。
- 24 『経済学研究』下篇, 史論:第八章 食人俗略考, 博文館, 大正元(1912)年;のち『河上肇全集』第6巻に収録, 岩波書店, 1982年。
- 25 『河上肇全集』第6巻pp305-306, 岩波書店, 1982年。
- 26 『法学協会雑誌』第二巻第七十一号, 明治二十二(1889)年。
- 27 哲学書院「法理学叢書」, 明治二十四(1891)年。国会図書館近代デジタルライブラリー。
- 28 『明六雑誌』に掲載されたものは、「財政変革ノ説」(第17号)、「国策ヲ振興スヘキノ説」(第18号)、「民選議院ノ時未タイタルノ論」(第19号)、「紙幣引替懇願録貨幣録ノ一」(第22号)、「正金外出嘆息録貨幣四録ノ二」(第23号)、「貨幣成行妄想録貨幣四録ノ三」(第26号)、「貨幣病根治療録貨幣四録ノ四」(第33号)、「鉄山ヲ開クヘキノ議」(第37号)である。
- 29 『日本学士院八十年史』第一編第一章「東京学士会院の設立」参照。神田孝平は文部大臣の「咨詢書」にサインする7人のアカデミー官僚の一人である(p65)。日本学士院, 昭和三十七年。
- 30 副会長は明治十五年六月十六日から同十八年六月十五日までで、幹事は明治十八年九月十六日から同十九年六月十二日まで、である。『日本学士院八十年史(資料編一)』pp17-18。
- 31 大久保利謙「明治啓蒙思想集解題」, 『明治文学全集』第3巻p445, 筑摩書房, 昭和四十二(1967)年。
- 32 同注釈7、狭間直樹氏の論文参照。
- 33 『人類学会報告』第一号奥付, 明治十九(1886)年二月;『東京人類学雑誌』第十三巻第四百四十八号に掲載する「男爵神田孝平氏の薨去」, 「故神田孝平氏の論説報告」, 「記念図版」を参照, 明治三十一(1898)年七月二十八日。ほかにも次のような参考文献がある。『明治文学全集』第3巻3, 1967;「東京学士会院会員神田孝平ノ伝」, 『東京学士会院会雑誌』第十二編第四冊, 明治二十三(1890)年五月二十八日;『淡崖遺稿』(非売品), 神田乃武編集兼発行, 明治三十四(1901)年;『近世絵本英名伝』, 富田安敬編, 東京開進堂, 明治二十(1887)年三月;『神田孝平略伝』, 神田乃武編集兼発行, 明四十三(1910)年七月。
- 34 官学者として、神田孝平がモースの考古調査に対して、支援をしたり、討論に参加したり、またはその考古の成果を皇室に「天覧」を供えたりして深く関わっていたと見られる。『大森貝塚』p13、151、195参照。
- 35 吳虞「吃人與礼教」, 『新青年』六巻六号, 1919年11月1日。
- 36 英語原文は『南方熊楠全集』別巻2に所収, 平凡社昭和五十(1975)年。日本語訳は『南方熊楠英文論考(ネイチャー)誌篇』に所収, 飯倉平照監修、松居龍五、田村義也、中西須美訳, 集英社, 2005年。
- 37 『河上肇全集』第6巻第288頁, 岩波書店, 1982年。
- 38 『ロンドン日記』1900年3月7日, 『南方熊楠全集』別巻2, 平凡社昭和五十(1975)年, p204。

- 39 同上, 6月28日日記, p222。
- 40 「支那人間に於ける食人肉の風習」, 『桑原鷲藏全集』第二卷, 岩波書店, 昭和四十三(1968)年, p204。
- 41 同上, p205。
- 42 桑原鷲藏(1924)の「Peking and the Pekingese. Vol. II, pp. 243-244」を引用したところに、「劊刀手がその斬り首より噴出する鮮血に饅頭を潰し、血饅頭と名づけて市民に販賣した」という一文があった。『桑原鷲藏全集』第二卷pp201-202。
- 43 久松潜一『「日本人論」解題』, 富山房百科文庫, 1977。なお、近年来のベストセラーである藤原正彦(1943-)の『国家の品格』も明らかに前者を参照したと見られる。
- 44 拙文「“国民性”一詞在中国」, 佛教学『文学部論集』第91号, 2007年:「“国民性”一詞在日本」, 佛教学『文学部論集』第92号, 2008年。
- 45 『芳賀矢一遺著』全二卷, 富山房, 昭和三(1928)年。
- 46 芳賀矢一『国民性十論』p3。
- 47 芳賀矢一『国民性十論』pp233-239。
- 48 足立北鷗(荒人)著『野蛮ナル露国』, 東京集成堂, 明治三十七年五月。pp268-271:「一七 食人種に近し」。
- 49 松居龍五によると、1900年3月から6月まで、ロンドン在住の南方熊楠が「日本人太古食人説」をまとめた。雑誌で公表しようとするとき、時にロンドン大学事務総長であるディキンス氏(Frederic Victor Dickins, 1839-1915)に日本に不利の理由で阻止されたとのことである。『南方熊楠英文論考(ネイチャー)誌篇』pp280-281参照。
- 50 『集外集』・「『奔流』編校後記」, 『魯迅全集』第9巻pp238-239, 学術研究社, 昭和六十年。
- 51 『国民性十論』の広告の広告詞, 『東京朝日新聞』日刊, 明治40(1907)年12月22日。
- 52 明治四十四(1911)年九月十五日発行第八版により。
- 53 『読売新聞』1908年6月11日。
- 54 『周作人日記(影印本)』(上)p418, 大象出版社, 1996年。
- 55 拙文「魯迅與日本書」参照。北京三聯書店, 2011年第8期。
- 56 『華蓋集統編』・「即座支日記」, 『魯迅全集』第4巻p376, 学術研究社, 昭和六十年。
- 57 南博:1994。前出p46。
- 58 拙文「魯迅與日本書」参照。北京三聯書店, 2011年第8期。
- 59 『魯迅全集』第14巻p72, 学術研究社, 昭和六十年。
- 60 中国:清光绪十四(1888)年上海蜚英館石印本;民国元(1912)年商務印書館涵芬樓鉛印本。日本:明治十四(1881)年東京猶興館刊刻, 秋月韋軒、箕輪醇点校本(十册);明治十七(1884)年東京堂報告堂刻本(43巻);明治十八(1885)年大阪修道館, 岡千切点, 重野安繹校本。
- 61 『魯迅手蹟和蔵書目録』は「資治通鑑考異 三十巻 宋司馬光著 上海商務印書館影印明嘉靖刊本 六册 四部叢刊初編史部 第一册有『魯迅』印」と記す。
- 62 『中国小説史略:第十六篇 明之神魔小説(上)』, 『魯迅全集』第9巻p57。『古籍序跋集:第三分』, 第10巻p94。いずれも、人民文学出版社, 1981年。
- 63 『准風月談』・「抄靶子」, 『魯迅全集』第7巻p242, 学術研究社, 昭和六十年。
- 64 二葉亭主人訳「狂人日記」(ゴゴリ原作)の最初と最後の一句である。『趣味』第二巻第三号、第五号 明治四十年三月、五月。

〔付記〕

本稿は2008年度教育職員海外研修による研究成果である。本論の資料調査にあたっては、国立民族学博物館、韓敏教授にたいへんお世話になり、執筆にあたっては、吉田富夫佛教学名誉教授より貴重なアドバイスをいただいた。ここに心よりお礼を申し上げる。

〔追記〕

「一校」の直後、書籍二点を目撃したので、先行研究・資料としてここに追記す。吉岡郁夫『身体
の文化人類学』（雄山閣、1991年再版）、礪川全次『人食いの民俗学』（批評社、1997年、歴史民俗学資料
叢書2）。

（り） とうほく 中国学科）

2011年11月15日受理